



「農業所得確保のため  
黒毛和牛の子牛生産」



肉用牛経営：

妙高市坪山 池田 和子氏

農家に嫁いで早や36年、当時、繁殖和牛3頭と水田70aの耕作で両親と夫4人の労働力、牛の粗飼料は稲わらと畦畔、山の野草で給与、家計の確保で夫は冬期間出稼ぎでした。平成7年に夫が病気になり農作業ができなくなり、一気に私の肩に荷がかかるようになりました。それ以前まで15頭前後の繁殖牛の飼育でしたが現在は8頭の飼育です。今までの繁殖牛経営の中で何をすれば一番良いのか考えて見ますと、子牛が生まれても約3割近く子牛の死亡事故が繰り返し発生していました。これでは経営が成り立たなくなりますので100%事故防止に努めることが大切です。

主な原因として11月から3月の冬期間は隙間風による温度差での肺炎、牛床の汚れによる乳房から哺乳中の細菌による下痢、脱水症状でした。多頭も影響があったかも知れません。対策として喚気が必要ですが牛舎の外壁の下見板の修繕等を行いました。下痢対策として牛床の敷料を早めに交換し子牛の腹冷え予防と補液時にヤクルトと納豆をミキサー処理をしてオリゴ糖添加し、下痢をしても4日から5日で治り農済組合の獣医さんからの治療も少なく大幅に改善され死亡事故が無くなりました。牛は経済動物なので1頭でも死亡すれば大きな損失です。本年度は胎内市所有の舞福牛の種雄牛交配で販売価格も向上しました。昨今子牛価格の安定感があり、米価の著しい下落、野菜価格も低迷で農家経済が厳しい中、繁殖牛経営はそれでも恵まれ現在の米価換算で子牛1頭で、水稲50a相当分になります。長男の協力を得て、稲わら、野乾草の確保で自給飼料の向上、安定経営をさらに目指して中山間地域の農業を守っていきたく思いますし、労働時間も計画を立てて健康でより良い子牛生産に励んで参ります。

「就農7年目を  
迎えて」



酪農経営：

新潟市江南区 坂井 武史氏

私は県立農業大学校を卒業して、2年ほど北海道・鹿追町にて研修を行いました。1年目は、経産牛250頭程の大きな牧場で、施設、作業の省力化や牛群管理での合理化などを体験させていただきました。2年目では、家畜改良を積極的に行っている60頭規模の牧場で、個体管理方法、牛の基本的な見方などを学びました。タイミングよくその時に管理していた牛が、町内、十勝、全道共進会へと駒を進めました。全道共進会ではリードマンを努めさせていただき、非常に感激し、経営主には貴重な体験を感謝している次第です。

今年で就農7年目になる訳ですが、就農当初は牛の状態があまり良くなく関節炎で起立困難な牛や黄色ブドウ球菌などの伝染性の乳房炎などの問題が多数あり、とても頭を悩ませました。とりあえず自分のできる範囲から手をつけて行こうと思い、まず飼料設計を見直し、メニューの合理化と搾乳方法の変更を行いました。この頃、研修会や各種勉強会などに積極的に参加して、カウコンフォートの重要性を認識し正しい搾乳方法を深く考えるようになりました。

平成16年にニューヨークタイストールに換え同時に水道管を太くして、1頭毎に1個のウォーターカップを設置しました。これによって関節炎は減少したのですが、牛床のスペースが広がったために牛体の半分が糞尿にまみれて、特に朝の牛の半端でない汚れ方にうんざりでした。その時、研修先の牧場がカウトレーナーを上手に使っていたのを思い出し、家族や周りの人に反対されながら思い切って設置してみた所、牛も人も汚れず体細胞数も、このころを境に減少し始め、今では20万前後までに下がりました。また、今は経費削減と自分の好みの牛を育てたいと思い、人工授精も始めました。牛群改良の面白さや奥の深さを改めて感じ繁殖技術の向上と高品質な生乳生産を目指して頑張っていくと決意を新たにしています。